# 復旦大学図書館との
# 館員研修交流をめぐって

高木理久夫

はじめに～研修が始まるまで
Ⅰ．復旦大学図書館における研修の内容と過程
Ⅱ．中国古籍の編目工作（目録カード編纂業務）
Ⅲ．私が見た中国の図書館および図書館員
Ⅳ．中国各地の図書館員との交流
Ⅴ．私が体験した中国での日常生活および社会状況
Ⅵ．復旦大学図書館員の本館における研修の内容と過程
Ⅶ．今回の研修の問題点
結び～今後の展望

## はじめに～研修が始まるまで

早稲田大学図書館と復旦大学図書館とが相互に館員を派遣し、交流を深めようという話が持ち上がったのは1992年のことで、当時館長であった野口洋二先生が復旦大学図書館を訪問した折、復旦側から申し出があったという。その後、両校図書館の文面による協議が続けられ、1993年６月、本館は、復旦大学国際交流弁公室主任・盧義民氏より『復旦大学と早稲田大学との相互交換研究員の待遇』と記された以下の研修人員の待遇に関する「覚え書」（1993年６月22日付）を受け取り、これをもとに本館は国際交流センターおよび人事部との正式な交渉に入った。

この「覚え書」に記載された待遇条件は次の通りである。

一．復旦大学が早稲田大学に派遣する研究員

1．往復の国際旅費は、復旦大学が負担する。

2．滞在費は、早稲田大学図書館が毎月20万円（免税）支払う。

3．宿舎は、早稲田大学が無償提供する。

4．医療費は、早稲田大学の負担とする。ただし慢性の病気の治療と歯科整形は除く。

5．講義の報酬は、研究員が授業を行うに関して、早稲田大学が別途報酬を支払う。その金額は、早稲田大学の規定により支給される。

二．早稲田大学が復旦大学に派遣する研究員

1．往復の国際旅費は、早稲田大学が負担する。

2．滞在費は、復旦大学が毎月800人民元支払う。この他、600人民元を旅行費として支払う。

3．宿舎は、無償で復旦大学外国人ゲスト宿舎に住むことができる。

4．医療費は、復旦大学の負担とする。ただし慢性の病気の治療と歯科整形は除く。

5．講義の報酬は、研究員が授業を行うに関して、復旦大学が別途報酬を支払う。その金額は、復旦大学の講義における短期専門家待遇により支給される。

（原文は中国語）

上記の待遇条件により、とりあえずは学術研究をおこなう、「研究員」という待遇で、互いに館員を派遣することが、取り決められたのである。

まず、早稲田側から人員を派遣するということで、人選がおこなわれ、筆者に研修要請がもたらされたのは、1993年７月のことである。その後も、ひき続き、大学本部と図書館との今回の研修に関する折衝、協議が続けられた。

1994年１月、復旦側から正式な招請状（1994年１月18日付）が届き、３月に大学によって筆者の中国への派遣が正式に決定され、４月１日、いよいよ上海での半年間の研修に出発した。

今回の館員交流プログラムの目的は、「それぞれの大学図書館の運営状況を把握し、専門業務を深化し、司書スキルを向上し、相手国における図書文化の実情を身をもって知ること」と掲げられていた。この目的は、私の

中国研修においては、充分達成されたと、自分自身では確信している。しかし、中国側は、初めての外国人研修員を受け入れてどう思ったのか、また来日した中国人の図書館員は、この研修をどのように考え、何を学んでいったのか、そのことを改めて考えると、相互の観点の隔たりは、かなり大きいように思う。

本報告は、日中両図書館にとって初めてのケースである館員研修交流に関する記録であり、できるかぎり問題点を抽出し、今後の日中の人員交流に対する展望を提示しようとするものである。

## Ⅰ．復旦大学図書館における研修の内容と過程

4月5日、秦曽復館長、副館長の方々、古籍部主任の呉格先生など図書館幹部の方々と正式に対面し、今後の具体的な研修内容の打ち合わせを行った。まず当分の間は、中国語の学習と古籍部における目録作成業務を中心に、研修を行うことが決められた。私の1週間のスケジュールは、次の通りである。

月曜日～木曜日　古籍部における研修
（勤務時間）午前8：00～11：00
午後13：00～16：30
金曜日・土曜日　図書館における自習（研修後半には古籍部における研修）
（勤務時間）午前8：30～11：00
休日は、日曜日と隔週土曜日、夏休み（7月14日～8月25日）

また、1日の研修の流れは、次の通りである。

8：30―9：30　図書館で日本語図書の整理を担当している張穎女史の指導のもと、中国語会話の訓練。
9：30―11：30　呉格先生および古籍部の館員の指導のもと、中国古籍のカード目録編纂。

11：00—13：30　昼休み。
13：30—16：30　中国古籍カード目録編纂。

夜は、その日の研修で学んだことを、ノートに整理したり、報告書の作成に費された。

日常の研修以外に、呉格先生に連れられて、上海以外の各地を旅行した。これら半年間の研修行動をまとめたものが《表１》である。大きな出来事としては、５月に図書館全館員集会で早稲田大学図書館および日本での仕事の状況，日常生活に関する報告をおこなったこと、６月に復旦大学図書館で開催された「古籍研討会」という中国全土の主要な大学図書館、公立図書館等の古籍担当者が集合した会議に参加し、早稲田大学図書館および日本の中国古籍整理業務に関して報告をおこなったこと、８月の北京旅行、そして９月には古籍部以外の復旦大学図書館各業務部門の参観と上海市内の大学図書館の参観があげられる。

ここでは、いくつかの旅行について触れておきたい(注１)。

（１）江蘇省周荘、同里への遠足（４月17日）

社会人教育の授業を担当する教職員の方々の慰安旅行に参加して、上海からバスで約４時間の地にある周荘、同里の地を訪れた。上海人にとっては郊外の遊覧地で、外国人もよく案内される。観光用に古い運河にそった町並みが、よく保存されており、典型的な江南の古鎮である。

（２）南京旅行（４月30日～５月２日）

上海の華東師範大学の古籍整理研究所と図書館古籍部の人たちの家族旅行に参加して、主に南京郊外を見てまわった。この旅行に参加できたのは、呉格先生が華東師範大学出身であり、復旦大学図書館に勤務する前は、華東師範大学図書館古籍部で勤務していたことによる。

（３）湖州市南潯嘉業堂蔵書楼訪問（５月16日）

民国初期の代表的な蔵書家である南潯劉氏の嘉業堂蔵書楼の訪問は、中国文化を何百年にもわたって支え続けてきた、江南の地方文化のよき伝統

**《表１》　上海復旦大学図書館古籍部における研修記録**

| | 日常業務 | 中国語学習 | 旅行・参観等 |
|---|---|---|---|
| 4月 | 家譜目録カード編纂。(52時間) | 18時間 | 江蘇省周荘、同里遠足（17日）<br>南京旅行（４月30日－５月２日） |
| 5月 | 地方志、家譜目録カード編纂。(64.5時間) | 19時間 | 上海図書館訪問（11日）<br>湖州市南潯嘉業堂蔵書楼訪問（16日）<br>上海図書館中国索引学会展示参観（23日）<br>図書館全館員集会参加・報告（25日） |
| 6月 | 家譜、地方志目録カード編纂。(56.5時間) | 15時間 | 合肥李鴻章全集編纂会議参観（４－８日）<br>復旦大学古籍研討会参加・報告（15—21日）<br>江蘇省常熟市遠足（20日） |
| 7月 | 地方志目録カード編纂（40時間） | ５時間 | — |
| 8月 | 経部書類目録カード編纂。(25時間) | — | 北京旅行（２日—21日）＊詳細は《表２》参照 |
| 9月 | 経部書類、詩類目録カード編纂。(101.5時間) | — | 同済大学図書館参観（８日）<br>華東師範大学図書館参観（９日）<br>上海交通大学参観（23日） |
| 総計 | 339.5時間 | 57時間 | — |

とその書物文化の豊饒さを体感でき、実に貴重な経験だった。日本において、ただ単に図書目録をいくつかひっくりかえして目録作業をおこなっているだけでは、決して体得できない中国書物文化を育んできた農村の地勢、社会環境を垣間見ることができたのである。すでに蔵書の大部分は、上海、北京などの大都市に散逸し、残されたものは、この蔵書楼と一部の版本、版木のみであったが、現在に至るも蔵書楼の書庫内は、書香が満ちていた。

（４）北京旅行（８月１日～21日）

中国近代史上はじまって以来という酷暑の上海をあとに、8月に入り北京旅行を単独で敢行した。目標は3つあった。第1は、中国図書の購入、第2に北京の名勝、旧蹟を参観、第3は図書館の参観、訪問である。この旅行に関しては、《表2》に日程等をまとめてみた。

第1の図書購入に関しては、かなりの収穫をおさめることができた。主

**《表2》北京旅行日程表**［8月1日～21日。天橋賓館(宣武区西経路11号)宿泊］

| | |
|---|---|
| 1日 | 15時46分上海駅発。 |
| 2日 | 10時16分頃北京駅着。<br>・毛主席記念堂、天安門参観。 |
| 3日 | 王府井散策<br>中華書局、商務印書館、外文書店、新華書店にて書籍探索。 |
| 4日 | ・革命軍事博物館、民族宮参観。<br>琉璃廠各書店にて書籍探索。 |
| 5日 | ・人民大会堂、故宮、景山公園、地安門外大街～鼓楼・鐘楼、雍和宮参観。 |
| 6日 | ・天壇公園参観。<br>琉璃廠各書店にて書籍探索。 |
| 7日 | 海淀区中国書店にて書籍探索。<br>・石刻博物館参観。<br>夜、前門賓館にて京劇鑑賞。 |
| 8日 | ・孔子廟・首都博物館、國子監・首都図書館、白雲観参観。<br>地図出版社にて書籍探索。 |
| 9日 | ・定陵、長城参観。 |
| 10日 | 午前中、日本へ購入図書発送。<br>前門、大栅欄、王府井散策。 |
| 11日 | 北京国家図書館参観。<br>宋平生先生(人民大学古籍整理研究所副所長)、沈燮元先生(南京図書館研究館員)と晩餐。 |
| 12日 | ・白塔寺、魯迅博物館、法源寺参観。<br>夜、前門賓館にて京劇鑑賞。 |
| 13日 | ・円明園、頤和園参観。 |

夜、前門賓館にて京劇鑑賞。
14日　全日休息。
15日　人民大学図書館訪問。楊東梁館長、劉建良副館長、武継山先生（人民大学古籍整理研究所長）、宋平生先生と会見。早稲田大学図書館と人民大学図書館との交流（図書資料および館員相互の研修交流）について話し合う。
・北京大学図書館見学。
前門、大栅欄散策。日本へ購入図書発送。
16日　西単大街散策。
・北京国家図書館（旧館）、北海公園参観。
夜、前門賓館にて京劇鑑賞。
17日　・盧溝橋、抗日戦争記念館、天壇公園参観。
夜、前門賓館にて京劇鑑賞。
18日　午前中、日本へ購入図書発送。
・古観象台参観。
琉璃廠各書店にて書籍探索
夜、前門賓館にて京劇鑑賞。
19日　琉璃廠各書店にて書籍探索。
・皇史成参観。
前門、大栅欄散策。
夜、前門賓館にて京劇鑑賞。
20日　琉璃廠各書店にて書籍探索。
・李大釗故居、故宮参観。
夜、前門賓館にて京劇鑑賞。
21日　11時20分、北京空港発。
13時頃、上海空港着。

に購入した図書の分野としては、考古学、民俗学、現在使用されている道教の経典、民国初期の地理書、そして文化大革命期の産物である毛主席語録、毛沢東バッチ、さらに当時の内部文献資料などがある。

第３の図書館訪問に関しては、中国人民大学図書館古籍整理研究所の宋平生先生の紹介により、同研究所長武継山先生、図書館楊東梁館長、劉建

良副館長から暖かいもてなしをうけた。対談においては、今後、両大学図書館の、人的交流を含めた積極的な学術、業務交流を図ることが俎上に上った。交流にむけて具体的な行動をすぐに起こすという話し合いではなかったが、外国とのより積極的な交流を望む(その真の思惑がいかなるものであれ)、現在の中国の図書館の考えをじかに聞くことができただけでも、日中両国の図書館状況の隔たりを思えば、大きな交流の一歩ではないだろうか。

(注1) すでに中国研修における感想は、次のものに手記を発表している。

○ふみくら　No.48(1994. 12. 12)　図書館員的工作—上海復旦大学図書館研修録抄

○　同上　No.49(1995. 2. 7)　中国書物文化の断面～「中国古籍」私話

○蔦　No.101(1994. 8. 15)　ふりさけみれば上海の月～中国研修日誌1、2

○　同上　No.102(1994. 11. 10)　ふりさけみれば上海の月～中国研修日誌3

○カレント　No.16 (1994. 12)　世界の大学・復旦大学

## II. 中国古籍の編目工作（目録カード編纂業務）

前章でふれたとおり、復旦大学図書館での私の研修は、中国古籍の目録カード編纂業務に、ほとんどの時間を費された。業務の大まかな流れは、以下のとおりである。

(1) 験収・・・発注、請求書処理、現物確認を行う。

(2) 財産登記・・・登記番号、著者、出版者、版次、来源、価格等に関して行う。

(3) 加工・・・蔵書印押印、分類、登録番号、貸出用カード袋の装備等を行う。

(4) 分類編目・・・目録カードの草稿作成を行う。

（5）総校・・・目録カード等の全般的点検。

（6）打卡・・・カードを「漢字タイプライター」で清書。

指導してくださった呉格先生は、復旦大学図書館古籍部主任であり、図書館でも数少ない研究館員である(注1)。また、現在、『全明文』の編纂を手がけている中国古籍整理界きっての優秀な研究員である。書物に関する知識、中国古典全般に関する奥深い知識をもつ、現代中国においては、数少ない伝統的な意味での、まさしく「文人」である。そのような先生の懇切丁寧なご指導のもと、中国古籍の編目工作に従事できたことは、幸せであった。

編目工作の手順は、まず古籍の序文、跋文等をじっくり丁寧に読み、さらにその装丁、印刷の状態等を勘案し、異版との比較をおこない、その版本の来歴を見定め、判明した事がらを記述規則にしたがってカードに記載していく。この作業は、原本と向き合い、自分の鑑定に従って、目録記述をおこなう機会に全く乏しく、中国古籍に関して正式な教育を受けてこなかった私のような者にとっては、すばらしい学習の機会となった。

その呉格先生の実践的な教えの多くを、ここで個々に詳述することは不可能である。呉格先生の教えを、私は、『中国古籍編目工作実習記録』3冊と、『中国日誌』3冊のノートにまとめてきた。いずれ中国古籍に関して、先生の教えをもとに研究を進めていきたい。

「実事求是」。ありのままの事実をただして真理を求めてゆく態度。毛沢東も好んだこの言葉を、何度も何度も、ことあるごとにくり返し、先生は私の目録記述を糺された。中国古籍の学習は、少なくとも10年は必要であるという。半年という期間は、あまりにも短かすぎたが、やっと自分自身が、図書館業務においてよって立つ基盤（業務に対する取り組み方、考え方）を得ることができたように感じた。実にかけがえのない体験であった。

（注1）中国の図書館員は、学校の教員の身分体系に対応して、その身分が以下のように階層化されている。

研究員・・・教授待遇。
副研究員・・・副教授（日本では助教授職）待遇。
館員・・・講師（日本では専任講師職）徒遇。
副館員・・・助講師待遇。
助理館員
その他、臨時工人（アルバイト）もいる。

## III．私が見た中国の図書館および図書館員

5月25日、復旦大学図書館において図書館員が報告者となって行われる全館員集会があった。私もその集会で、早稲田大学図書館の情況、私の日常業務、生活ぶりについて報告するように求められた。とくに日本の図書館員の仕事ぶり、その中国の図書館員との違い、ひいてはなぜ日本人は熱心に働くのかということを説明してほしいという館長先生直々の要望が伝えられた。私が考えるに、それにはかなり深刻な理由がある。

現在、中国は市場経済導入を推進している。それは、まず一部の人々、地域を経済的に豊かにしていくという方法である(大雑把に言えば)。競争原理に基づく「市場経済」は、すなわち「資本主義経済」のことである。建前上、階級のない、経済的にも平等な社会を標榜する社会主義国家の内部に、資本主義のシステムを大幅に取り入れていくのである。この「市場経済」の導入以来、国民の間には、「毛沢東思想」に変わって、「拝金主義」が猛威をふるっていることが、喧伝されて久しい。

だが、とにもかくにも新しい経済社会を築くためには、「親方日の丸」ならぬ「親方五星紅旗」にどっぷりとつかりこんでいる公務員のモラールの向上が、最大の難問である。図書館においても、いかに館員のモラールを引き上げてゆくか、そのための労務管理をどうしたらいいのかが、切実な問題としてある。その問題解決の模範（？）として同じ図書館員の日本人の意見を聞きたいというのである。

慣れない中国語で30分ほどの報告書を作成した。タイトルは、「日本早稲

写真（1）：1994年6月20日、江蘇省常熟市翁同和故居にて呉格先生（左）と。

田大学図書館の紹介」、内容は、自己紹介、日常生活、早稲田大学図書館の組織と概要、図書館の情報システム、図書館員研修と館員の仕事の情況に関しての話であり、そのあとひき続き早稲田大学図書館の紹介ビデオを見てもらった。

なぜ日本人の教育関係者は、必死になって働くのかという理由として、私は4つの理由を報告の最後に話した。第1には、(物価の変動等に見合った)基本的な給与が保証されていること、第2には、高等教育機関に勤める人間は、それなりに社会的な評価を得ること、第3として、日本には1千校以上もの大学、短期大学があり、なおかつ就学者人口が減少してきているので、学校間の競争があり、より質の高い学生を得るために、質の高いサービス水準を追求しなければならないこと、そして最後に、日本の国土は貧弱であり、これといった豊かな資源も産物もなく、近代国家としての日本は、政策として教育を重視し、優秀な人材を以って国を興していった。近代日本にとって教育こそ国家の根幹であり、だからこそ現在でも日本人の教育に対する関心は強く、教育の仕事に従事する者はそれなりの「尊敬」を受ける、だから私達図書館員も懸命に働くのだということを話した。

私の、何とも心もとない中国語で、話の真意をどの程度わかってもらえたのか、大いに疑問であり、また私が掲げた理由がほんとうに的確に日本の教育事情をとらえているのか、これまた問題があるだろう。しかし、この4つの理由は、その裏を返せば、全て私が現在の中国の教育情況に感じ

**写真（2）**：1995年8月21日、趙申氏（右から4人目）と外国図書担当のメンバー。

る負の側面なのである。

すなわち第1には、教育予算が絶対的に不足している情況がある。9月に復旦大学図書館の各業務部門や、上海市内の他大学を見学したおり、「現在の問題は何か」と質問すると、決まって予算が足りない、金が無いという答えしか返ってこなかった。復旦大学図書館でも図書予算が不足しているので、ここ4、5年、マイクロフィルムの撮影ができないということで、撮影室は無残にも打ち捨てられたままになっていた。復旦大学の学生数は1万人弱で、教職員の数はおよそ5千人だと聞いた。単純に考えれば学生2人に1人の教職員がサービスを提供する割合である。全教職員や退職者、そして学生たち（基本的に全寮制）すべての食住を、大学が負担するのが原則になっているのであるから、現在のような猛烈な勢いで市場経済が発展している時代には、大学予算は、教職員の人件費でその大部分が占められてしまうのではないだろうか。図書の購入予算がかなり以前から据え置か

写真（3）：1994年4月19日、古籍部における研修にて。
沈偉達先生（左）、呉格先生と。

れているのも無理からぬ情況のように、私には思えた(注1)。特に外貨で支払わなければならない洋書購入部門は、国家の補助金に100%頼っているので、充分に日本や欧米の図書を購入できないと思われる。国や上海市の予算ばかりに頼っているだけでなく、復旦大学は、ハミガキ粉を開発して売り出したり(実際、私はそのハミガキ粉の支給をうけた)、工学部に「爆破隊」なるネーミングの工作隊があり、上海市内の租界時代の古い建物の破壊工作を請け負い、上海市の再開発の一翼をにない、そこから収益を上げている。私の住んでいた「専家楼」も基本的には復旦大学に招かれた外国人教師向けの宿舎であるが、大学外部の外国人も住んでいた。1日の宿泊代はおよそ600元、これは上海市内のやや高級なホテルと同程度の料金である。

とにかくお金を稼がなければならない。空軍でさえホテルやカラオケバー、デパートを経営しているほどである。国立大学といえども「自力更生」しなければならない。なお、図書館職員の平均的な給与は400元（日本円にして約4800円）から800元（日本円約9600円）ほどであるという。私は、図書館では最高水準（？）になる800元を月々研修費として支給されていた。ただしこれは過不足なく、恵まれた日常生活をおくれる金額ではない。

第2に、学校の教師の社会的評価は、たいへん低いそうである。これには理由として、前述したように、給与の額が低いことが大きくかかわっているようである。とにかく、教育熱心な上海人の親たちの夢は、子供をい

**写真（4）**：1994年9月29日、復旦大学図書館会議室にて。
秦曽復館長先生（右から4人目）とお世話になった館員の方々と。

い中学校(中国の中学校は日本の中学校と高校をあわせたもの)、それも外国語学校に通わせ、第一に英語、第二に日本語をマスターしてもらい、いい大学(復旦大学もこの範疇に入る)に進学させ、外国資本の企業に勤めさせることである。国営企業とは給与の差が格段にあるそうだ。だが大学進学率自体は、全国的にはまだまだ低い情況にある。

私が思うに、給与の面ばかりでなく、1966年から1976年にわたる「文化大革命」の影響が、現在の教育情況、ひいては教育者の社会的地位に未だ暗い影を落としているのではないだろうか。文革の時代、一切の既成権力の打倒が叫ばれ、学校においてまず「打倒」すべき対象になったのは、教師であった。教師をつるし上げ、暴行を加えたり、さらには「読書無用論」なる説まで唱えられ、農村での労働従事(「下放」とよばれる)が積極的におこなわれた。農民革命、武力革命を是とし、農民、労働者の国であるという理想で成立した国家において、歴史的にみて知識人が辛い体験を多くし

たことは、悲劇としか言いようがない。教育者（すなわち知識人）の社会的評価の低さは、現在の中国国家が抱える、より根本的な思想にかかわっていると思わずにはいられない。

第３に、中国人の「サービス業務」に関する情況である。中国の大学で働いている職員たちが、自分の仕事を、日本人が考えているような、第三次産業、いわゆるサービス業と自覚しているかどうかは、定かではない。ここでは、私が街中の商店で体験したことを、事例として考えてみたい。

日本で発売されている様々な中国の旅行案内書に紹介されているように、一般の商店などの客に対する応対は、自分自身、実際に体験してみて、かなり苦い思い出が残った。そのうちのふたつの出来事：

○６月某日、福州路の上海古籍書店（同名の、中国でも最高の学術出版社が直営する店）のカウンターで、レジの順番を待っている時、ある一人の若い店員が、モデルガンを振り回しながら、レジ係の店員に「金を出せ」といったポーズをとって私の目の前でふざけだした。茫然としてしまった。少なくとも学術書を扱う書店で、大声を張り上げてこんなまねをしてほしくないというのが、その場に居合わせた日本人としての心情であった。

○７月某日、宿舎近くのカナダ資本のパン屋、Willyをよく利用していたのであるが、例によって私がたどたどしい中国語でパンの名前を言ってカウンターの店員に注文したところ、店の奥から、パン作りの若い男が、私の鼻先めがけてそのパンを投げつけてきた。おつりを投げられることはよくあり、多少慣れてはいたが、商品を、それも食べ物をこのように粗末に扱う（決して粗末に扱っているわけではないのかもしれないが）中国人の感覚には、強い抵抗を感じた。

万事、このような調子であるわけではないが、お客には笑顔で接するようにとか、礼儀をきちんとしなさいなどという日本流（世界的にも常識に思えるのだが）の接客態度は、皆が対等であり、ものを売るからといってとりたてて謙遜する必要はないと考えているように思われるごく普通の中国人には、根本的にそぐわない感覚なのではないだろうか。このあたりのことは、中国に進出した日本企業の人たちの苦労話として、さんざん日本でも

知らされている。要は、中国は社会主義国家であり、日本のようなサービス産業国家ではないことを、強く認識しておかなければならない。

また、大きな商店にいる数多くの店員の様子を見ていて、日本人ならば一人でこなせる仕事を、最低5人で分配しているように思える場面がままあった。人件費が安いので、このようなことができるのであろうが、やはり「市場経済」の原理からすれば問題だろう。だが、中国の人口は、およそ12億人である。だから、なるべく仕事を、より多くの人々に向けて作りだし、分配しなければならず、一概に無駄な雇用であると、外国人が批判できる問題ではないようにも思える。人口と雇用の問題はそれだけ切実に肌に感じられた。

以上、中国の図書館および図書館員の情況や、市井で体験したことを通して、考えたことである。現在の中国の図書館の業務運営、管理面は、日本の情況に比べて、後進的な情況にあると思われる。それが、私には単に予算不足によるものではなく、図書館をとりまく社会情況、ひいては中国社会そのものが現在抱えている、人と人との社会関係のひずみ(金や贈り物がすべてであるようなものの考え方の流行）によるものではないかと思われる。図書館においては、少なくとも、特別な知識を有する研究員について学習する以外、実際の業務から得る専門知識は、少いと思われる。しかし、このことを、一概に悪い情況であると決めつけることはできない。文中でもふれた通り、中国社会は日本とは異なる、共産主義の社会づくりを目指している社会であり、12億人といわれる人口圧力も相当なものである。仕事に対する考えも、それ故、自ずから日本とは差異が生じてくるのである。このことを日本人はもっと謙虚に考えなければならないと思う。

（注１）復旦大学図書館の「採訪部」（図書の購入を主に担当する）を９月に参観した際、復旦大学図書館の図書予算について、次のような記録が残っている。

［図書の年間購入予算］（中国元と米ドルの２本立）

900,000元（復旦大学の経費より支出。約900万円）

＊そのうち中国図書の経費にあてられるのが400,000元、残り500,000元が外国図書の購入経費にあてられる(「学校経費」と、この50万元にはメモされている。おそらく、特に、大学本部から支給される費用で、中国元で購入できる外国図書にあてられるのだろう)

＄140,000（国家教育委員会の経費。約1,400万円）

＊「中国教育図書進出口公司」などを通じて、外国図書を購入するために全額あてられる。

1元＝10円、1ドル＝100円として換算してみた。中国元、米ドル全額をあわせても日本円で、約2,3000万円の予算である。この額が高いのか、低いのか、経済情況があまりにも違いすぎるので、一概に日本の図書館などと比較することはできない。また、中国の大概の図書館は、「複本制」をしいており、復旦大学図書館でも、全学の図書購入を一元的に管理しているが、研究閲覧室用、学生閲覧室用、保存書庫用等、同じ図書を、4～8冊も購入するようにしており(中国図書の場合)、予算の負担がかなり大きいように思う。

なおこのような予算情況で、年間の平均購入冊数は、次の通りである。

中国図書　40,000～50,000冊

外国図書　3,000～4,000冊

※なお、復旦大学図書館の業務組織等に関する報告としては、趙申氏の「現代化にむけて～復旦大学図書館紹介」(『ふみくら』No.51 1995．7．17)を参照されたい。

## Ⅳ．中国各地の図書館員との交流～「古籍研討会」への参加

私が、今回の中国研修における最大の交流の場と考えたのは、6月15日から21日にかけて復旦大学図書館で行われた、「図書館古籍研討会」である。この会議には中国の主だった大学図書館、公共図書館、研究所の古籍整理担当者約50人が一堂に集い、現在の中国古籍目録編纂業務を取り巻く情況について、その問題点を話しあった。この会議の主催者は呉格先生であり、このような会議が開催されるのは、今回が初めてだそうである。日程、会議の内容と報告者は、次の通りである。

6月14日　　代表団到着。

15日午前　開幕式、復旦大学図書館参観。

**写真（5）**：1994年6月復旦大学図書館にて開催された「古籍研討会」の記念撮影。

午後　（報告）図書館の古籍業務の現状と展望
　　復旦大学図書館　呉格先生

16日午前　（報告）『中国古籍著録標準』の修訂について
　　北京大学図書館　沈乃文先生

午後　（報告）日本の漢籍目録業務の情況について
　　早稲田大学図書館　高木理久夫

（報告）米中共同中国古籍機械可読目録の現状と未来
　　北京大学図書館　沈乃文先生

17日午前　（討論）図書館の古籍業務はいかに時代のニーズに応えていくべきか

午後　（報告）古籍版本の鑑定と著録中のいくつかの問題について
　　人民大学図書館　宋平生先生

18日午前　（報告）『中国古籍総目』の編纂と実施
　　国家古籍整理規画小組　張力偉先生

午後　（報告）古籍の整理と開発について
　　復旦大学古籍整理研究所　章培恒先生

19日　日曜日につき自由行動。
20日　　（参観）常熟市図書館、鉄琴銅剣楼、翁同和故居等
21日午前　（討論）古籍の共同整理と開発の展望
　　昼　　会食後解散。

また、出席者の所属単位は、次の通りである（順不同）。

蘇州市　蘇州大学図書館、蘇州市図書館
天津市　南開大学図書館
太原市　山西大学図書館、山西省図書館
昆明市　雲南大学図書館
長春市　東北師範大学図書館、吉林省図書館、吉林大学図書館
厦門市　厦門大学図書館
済南市　山東師範大学図書館
上海市　上海師範大学図書館、華東師範大学図書館・古籍整理研究所、上海書店出版社、上海図書館、上海辞書出版社図書館、復旦大学図書館
保定市　河北大学図書館
西安市　陝西師範大学図書館、西安市文物局古籍珍蔵室
泰州市　泰州市図書館
武漢市　武漢大学図書館、華中師範大学図書館、湖北大学図書館、武漢図書館
広州市　暨南大学図書館
泉州市　泉州市図書館
北京市　首都師範大学図書館、人民大学古籍研究所、首都図書館、北京大学図書館、国家古籍整理規画小組、北京師範大学図書館
金華市　浙江師範大学図書館
南京市　南京図書館
開封市　河南大学図書館
湖州市　湖州市図書館
南昌市　江西省図書館
杭州市　杭州市図書館

代表者は、その大部分が、各館の副館長、主任クラスレベルの、現場業務を取り仕切っている人たちである。北は東北の長春から、南は雲南の昆明

まで、中国の図書館古籍整理担当者が一堂に会する機会などめったにない。この会議では、中国語がしゃべれないハンディキャップなど気にせず、とにかく目立って顔を通しておこう、中国と早稲田の図書館相互協力を呼びかけておこうとした。そのため、まず15日、呉格先生の報告が始まる前に、次のような要旨のビラを参加者全員に配布した。

中国の図書館員の皆様へ

早稲田大学図書館は、日本有数の大図書館です。我が館は現在、国際間の図書館相互協力活動を推進しています。我が館は、ヨーロッパ諸国、アメリカ、カナダと相互協力関係を結んでいます。特に、ロシヤ国立図書館とは親密な交流関係にあります。これらの相互協力は、IFLA協定型式にのっとり、国際間相互図書貸借（International loan）、コピー請求（Photo copy request）等を内容としています。

ただし我が館は、いまだ中国の図書館と相互協力の関係がありません。日本においては、多くの研究者や学生たちが中国の書籍、雑誌論文、中国古籍の閲覧を希望しています。

いつでも我が館は、あなたがたの図書館の要求に答えます。

まず我が館に、貴館の要求をお送りください。我が館は、必ず貴館の要求に答えます。我が館は、中国の図書館文化活動の発展を希望します。

（原文は中国語）

このILLの呼びかけに対しては、私が日本帰国後すぐに、上海交通大学、華東師範大学、同済大学から、雑誌論文のリクエストがきた。その後、上海交通大学とは、こちらからも主に理科系の雑誌論文のリクエストを出したり、また交通大学側からも３件ほど、リクエストがよせられたりして、現時点（1995年10月）では、たいへん良好な関係が維持されている。

さて、私は上海に来る前、事前に日本から我が館の『漢籍分類目録』、『館蔵資料図録』、『図録大隈重信』を各５部ほど、さらに我が館の紹介ビデオ

とWINE紹介ビデオを送ってもらっており、それらが現地での交流に際してたいへん役にたった。資料交換という面では、こちらの1冊1万円もする漢籍目録と、中国側の10元(日本円で100円)するかしないか、あるいは「内部資料」とされる値段もない目録とを交換することは、あまりの経済格差ゆえ、確かに気が引け、かつ「勇気」が必要だった。ただし、間違ってはいけないこと、それは、この経済格差は、決して日中間の「文化格差」ではないことである。たとえ10元の目録でも、研究者にとっては、はかり知れない学術価値がある場合がある。ただし、今後もこのような寄贈交換を恒常的におこなっていくか、どうかは別問題である。

私の寄贈交換の要望を聞いてから、すぐ参加者から反応があり、山西省図書館、吉林省図書館、人民大学古籍研究所の方々から、各館の中国古籍目録の寄贈をうけ、私も手持ちの目録を1冊づつ寄贈した。また、10月に帰国後、各館の古籍目録をおり返し送るという約束で、東北師範大学、上海師範大学、暨南大学、首都師範大学、浙江師範大学、河北大学、江西省図書館、杭州市図書館、常熟市図書館には、我が館の『漢籍分類目録』を寄贈した。このうち何等かの返事があったのは、すでにその古籍目録を頂戴していた杭州市図書館と河北図書館を除いて、上海師範大学と首都師範大学のみである(1995年10月現在)。

さて、私が6月16日におこなった報告について記しておきたい。題目は、「日本の漢籍目録業務の情況について」(中国語原題は「関于日本的中国古籍編目工作情況介紹」)というものであり、次のような内容の話をした。

序言～自己紹介
1・中国古籍目録業務に関する日本の図書館員の研修体験
2・早稲田大学図書館の中国古籍について
3・日本の中国古籍目録業務の問題点
4・機械化目録に関する私見
結語

私は、日本を代表して、日本の中国古籍の目録整理情況に関して語る資格も、能力もなく、全くもっておこがましいことである。まず、序言において、私は、中国古籍整理の専門家などではなく、三年ほど前に我が館の『漢籍分類目録』作成のため、わずかばかりの手伝いをした程度の経験しかなく、今回の報告は、私のそのわずかな体験だけに基づくものであることを、お断りした。

第1章においては、主に私がすでに体験していた、京都大学人文科学研究所と東京大学東洋文化研究所でおこなわれている漢籍研修について話をした。

第2章においては、早稲田大学図書館の所蔵する中国古籍や、『漢籍分類目録』について話をした。

第3章においては、私が常日頃感じている問題点、すなわち一つは、中国古籍の整理に関する全国統一的な記述規則は、日本にはなく、したがって中国古籍の連合目録が未だ存在しないこと、もう一つは、日本人の「漢籍」というものの考え方について話をした(注1)。

第4章においては、中国古籍目録の機械化入力に関する私見を述べた。私が改めて説くまでもなく、中国古籍の目録記述業務には、たいへんな習熟と学識が求められる。このような古籍を、大量かつ迅速に数値化する作業が果たして可能かどうか。すでに、この古籍のコンピュータ化の作業を終えたと南京図書館の副館長は語っていたが、はたしていったい、その機械化目録が、どれほど学術研究の有効な工具として、利用者サービスに応用され、その要求に応えうるものなのか、体験した中国の図書館運営、管理の現状を思うにつけ、失礼ではあるが、はなはだ心もとなく思う。ただ単に、書誌画面ひとつが端末機にあらわれたとしても、「このような古書があるのか」という所蔵情報が得られるだけで、それだけではカード目録や冊子体目録と何等変わらない。現在、大量に出版されている図書と前近代の古籍とを、同じ性格の図書資料として扱っていいものだろうか。まず、対象の性格、利用のされ方を考えてほしい。版本学や目録学を専攻する研

究者が、このような数値化された情報を操作するだけで自分の研究を済ませそうとするだろうか。もしも、より有効にコンピュータの機能を古籍の研究に応用しようというのであれば、マルチ・メディア方式により、求める古書の装丁から、封面、本文に至るまで全てが映像情報としておさめられ、検索項目が多岐にわたるようにしなければ、真に研究に役立つものとはならないのではないだろうか。より目録業務の合理化が図られる（？）という理由だけで、手間ひまのかかるカード目録の肩代わりとして、古書の目録情報を数値化しようという考えは、私には極めて思慮の乏しいものであるように思える、というような趣旨の話をした。

以上、報告においては、特に第四章を強調し、西洋式な（すなわち欧米的な。日本もこの範疇に入る）図書館業務の思想にふりまわされるのではなく、もう少し貴国の現状を見つめて、中国の伝統的な書物文化の思想をより尊重し、育んで、中国独自の特色ある目録業務を推進してもらいたいとして話を結んだ。

図書館の全館員集会に続いて、中国語で報告書を作成し、中国語で読み上げたのであるが、今回は内容が内容であるだけに、かつまた一応、専門家に対する発言であるので、呉格先生が私の傍らにいて、私の舌足らずな中国語を意味の通ずるように、言わんと意図することがらを、正式な、深みのある中国語に「翻訳」してくれた。内容的にもかなり杜撰なものではあったが、この報告を機に、他の参加者たちとの交流がスムーズになり、自然に打ち解けることができるようになった。交流の絶好の機会として、このような貴重な場を設けてくださった呉格先生の配慮には、心から感謝する次第である。

（注１）この件に関しては、「ふみくら」No.49（1995. 2．7）所載の拙稿を参照されたい。

## Ⅴ．私が体験した中国での日常生活および社会状況

上海における日常生活は、やはり必ずしも順調というわけにはいかなかった。

まず、健康・食生活の面である。上海生活がはじまった当初、２週間おきくらいの周期で、体調を崩した。朝晩の気温差が大きく、大気も東京に比べて汚染がひどく、生活用水もかなり不衛生で、赤茶けた色をしていた。最も困ったのは、食あたりである。６月に２度、７月に１度、患ってしまった。特に７月の食あたりはひどい腹痛と下痢を伴うもので、おなかが痙攣してしまい、そのひどい痛みに耐えられず、救急車を呼んでもらおうとしたほどである。原因は、どうやら夕食に食べた豆腐にあったようである。６月の食あたりは、スープに原因があった。食事場所は、３度とも大学の教職員もよく利用する大学にほど近い食堂である。この後、この食堂を利用することもなくなり、夕食はケンタッキー・フライドチキンとチャーハンを食べるだけで、上海にいる２ヶ月間を乗り切った。宿舎の食堂は、あるにはあるが、味は極めて悪く、４月、５月の２ヶ月間で忍耐の限界に達した。お昼も同様に、初めの２ヶ月間は、図書館近くの教職員食堂で、館員の方といっしょに食事をとったのであるが、これまた味および食堂の不潔さに耐えきれず、６月以降は、毎日朝昼、同じパンをかじっていた。思えばかなり悲惨な食生活である。自炊もやればできたのだが、野菜ひとつ料理するにも、１時間ほど洗剤につけてから料理するように言われていたので(寄生虫を殺すため。中国では人糞が主な肥料である)、めんどうくさがり屋の私には、やる気さえおこらなかった。市街のホテル住まいならば、安全な食事に毎日、ありつけることができるのだがなあと、心から思った。

実際、この夏も、上海では食中毒が猛威をふるい、新聞記事によれば、何人も食中毒で死亡している。一般市民の衛生に対する意識は、まだまだ低く、食事など安くて腹がいっぱいになればいいという感じで、上海の人々自身も衛生的ではないと思っている屋台が、結構繁盛している。

また街中の衛生状態には、気分が滅入ってしまうことが多い。ゴミは、ちゃんとゴミの収集場所が通りに面してあるが、少なくとも何十日も収集に来ないので、収集場所付近がゴミであふれかえり、あまつさえ、そのゴミ箱の中に、馬桶の中味、すなわち大小便を捨てる人までいて、その悪臭は、耐えられるものではない。新聞にもゴミ問題に関して、よく投書が掲載されていた。

さらに、大都市上海の問題は、農村部から上海に流れこんで来た多くの人たちが（150万人と言われているが、それ以上にも思われる）、農村の生活様式そのままを市街地に持ち込み、環境ばかりでなく、街の治安までも脅かしていることである。これら農村部からの流入人口は、「盲流」という言葉で有名である。原則的には、現在の中国では、農村部と都市部の戸籍は、厳密に分けられており、移住の自由はない。十月一日の国慶節を前にして、９月、上海市は大々的に、これら不法移住者が勝手に空き地や路上に作った住居を撤去し、バスをチャーターして彼らを出身地におくり返した。この模様が連日のように、テレビニュースや新聞で報道された。この行政処分を受けた人たちは、盲流のごく一部であるだろうし、また国慶節が終われば、舞い戻ってくるのかもしれない。

中国の農村部における過剰労働人口は、２億人と公式には言われている。単純に考えれば、日本ふたつ分、アメリカと同じ人口の潜在失業者を抱えているのである。想像だにつかない数字である。中国の山間部の家庭は、たいへん貧しい生活を余儀なくされている。上海のテレビ局では、「山間部の学校にいけない子供たちの教育基金として、あなたの300元（日本円約3600円）を寄付してください」というキャンペーンを、積極的におこなっていた。300元を学校に入学する際、教育費として払えないばかりに学校に通えない子供たちがたくさんいるのである。現金収入の乏しい、山間部の農村の経済状態は、「市場経済」導入後、上海などの大都市や沿海地区の農村の繁栄に比べて、より苛酷な状態にあるようである。日本でも、東京と地方との格差が取り沙汰されるが、中国の場合、日本に比べられるような、生

《表 3》　上海における生活支出（単位：人民幣。一元は10円にて換算）

| | 食費 | 図書費 | 郵送費 | 交通費 | タバコ | 旅遊費 | 生活雑費 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4月 | 538 | 1169.55 | 458.56 | — | — | — | 713.4（胡弓代金を含む） | 2879.51 |
| 5月 | 670.5 | 1011.5 | 851.14 | — | — | — | 434（主に印鑑代金） | 2967.14 |
| 6月 | 1556.8 | 1530.9 | 593.95 | — | 257 | — | 838.8 | 4777.45 |
| 7月 | 1278.15 | 2643.78 | 1943.2 | 221.8 | 473 | 8380（北京旅行費を含む） | 2681.85（土産印鑑代を含む） | 17621.78 |
| 8月 | 2605.47 | 21254.58 | 5961.4 | 1602.4（上海帰航空代を含む） | 123 | 1311.15 | 1654.3 | 34512.3 |
| 9月 | 2652.66 | 3940.76 | 4715.16 | 5 | — | — | 774.8 | 12088.38 |
| 計 | 9301.58 | 31551.07 | 14523.41 | 1829.2 | 853 | 9691.15 | 7097.15 | 74846.56 |

総計＝74846.56元（約748466円）

※中国の貨幣単位「元、毛、分」　1元＝10毛、1毛＝10分

やさしい事態ではないのである。農業国家として、この社会の「市場経済」化の問題に、今後どう対処していくのか。一歩間違えれば想像だに絶するほどの悲惨な状況に、陥りかねないだろう。私のような経済学に疎い者でも、この国の未来に、一抹の不安を感じざるをえない。

さて、《表３》として、上海における私の経済生活をまとめてみた。食費は、６月を境にぐんぐんと高くなっていった。これは、ミネラルウォーターの消費量が多くなったためである。図書購入費も、相当なものである。購入した図書の大部分は、ダブり本以外、ほとんど寄贈というかたちで、

図書館に蔵書としておさめた。他に、外国人としてそれなりのサービス、質のよい商品を求めるとなると、日本での生活費と、それほど大差がなくなってしまう。それから、公共の交通機関は、四六時中、殺人的に混みあうバスと、外国人と見ると運賃をしょっちゅうごまかすタクシーしかなく、自然と上海の中心街へ出るのがおっくうになってしまった。毎週土曜日に大学が外国人研究者向けに準備してくれる買い物バスを、市街への足として、利用する以外に手はなかった。

以上、上海における日常生活は、私にとって、決して楽なものではなかった。もしも、市中心街での生活であったならば、だいぶ上海に対する印象は、違ったものになっていたに違いない。

## VI. 復旦大学図書館員の本館における研修の内容と過程

1994年10月1日、日本に帰国後、翌日からたまっていた仕事の整理を開始し、休む間もなく、年末から、今度は翌年2月に来日する復旦大学図書館員趙申氏（男・40歳）の受入れ準備に追われた。入国管理局へ提出する書類手続きに関しては、国際交流センターに御指導をあおいだ。

1995年2月22日、趙申氏が無事に来日し、8月22日までの半年間、早稲田大学図書館における研修に務めることとなった。なお宿舎は、早稲田奉仕園のゲストハウスを準備した。

趙申氏は、復旦大学図書館においては、「技術服務部」（技術サービス部）の責任者であり、資料複写、ワープロでの文章作成、雑誌製本等の業務を管理する、図書館の幹部の一人である。当初の彼の日本における研修目的は、次のようなものであった。

［早稲田大学の］図書館の現状を知り、先進的図書館管理経験を学び、特にコンピューターによる図書、刊行物管理及び利用者へのサービス方面の経験について勉強したい

これに対し、私が研修指導において留意した点は、

業務面において、単に技術習得を目的にするのではなく、業務運用の

考え方、個人の自主、自立的な仕事への取り組み方など、普段、私たちが日本人社会ではあまり意識しない個人と組織、個人と仕事との関わりなどに、特に注意して、研修の助言をしていきたい。

ということであった。中国の図書館員の業務状況や、業務運用面を見てきた私が、是非、中国人の同業者に実感してもらいたかったことである。

さて、《表4》に、趙申氏の半年間の研修記録をまとめてみた。研修時間は、毎週月曜日から金曜日まで、午前9時から午後4時まで、休日は、土曜・日曜・祝祭日とし、大学の前期日程が終了する7月21日までを、図書館における研修期日とし、夏休みの間は、旅行や報告書作成等自習期間とした。

第一に心配していたことは、彼の日本語能力の問題であった。読解力は、それなりにあったと思うが、会話と書く能力には大変、不安を感じた。ただ、こちらが話すことを、一方的に聞いているだけでは、研修を指導している側も疲れてしまう。それなりのリアクションが欲しい。早稲田奉仕園では、外国人の滞在者向けに、日常会話のレッスンを受けられるのだが(ただし有料)、本人にその意志がなかったので、なりゆきにまかせることにした。しかし、半年間のうちに、それほど彼の日本語が上達したとは感じられなかった。これは私の中国における研修での問題点でもあるのだが、成果はどうあれ、やはり少くとも日常会話には熟達するように努力だけはしておかなければならないと思った。

趙申氏は、我々と同じ労働条件で、単純なノルマをこなすように、仕事を数多くこなしていきたいと、しばしば私に語ったが、それは、正直に言って、どの仕事においても無理であり、また、研修の趣旨にもそぐわないことでもあった。上から命じられるままに、何も自分で考えることなく、単純な仕事を物も言わずにこなしてゆくようなことを日本でしていても意味はない。すなわち彼には、図書館の幹部職員、指導者として、「なぜこのような仕事をするのか」、「どうしてこの仕事は必要なのか」といった考えをもって、研修に臨んでほしかったし、このことはくり返し、彼に伝えた。

《表４》　日本における趙申氏の研修記録

| 月 | 図書館業務研修 | 見学等 |
|---|---|---|
| 2 | 22日成田に来日。<br>24日来館。今後の予定について協議。<br>27-28日図書館業務概要説明。 | 新宿区役所、中国大使館教育処において在留手続き等の処理。 |
| 3 | 1-8日蔵書点検業務。<br>13日本庄分館で寄贈本処理作業。<br>14-22日和書目録入力業務説明（国内）<br>23-31日目録入力点検作業（和書ＤＢ） | 9日江戸東京博物館見学。 |
| 4 | 3-31日国内図書課における業務研修。<br>(受入れ、寄贈交換、資料保存、稲門ライブラリー、装備、書庫管理、目録入力点検等の説明、実務) | 5日浅草にてお花見。<br>21日慶応三田メデイアセンター等見学。<br>25日都立中央図書館、慶応藤沢キャンパス見学。 |
| 5 | 8-26日総合閲覧課における業務研修。<br>(図書選書・発注・貸出・返却、インフォメーション・レファレンス、ＩＬＬ業務等の説明、実務)<br>29-31日雑誌課における業務研修。 | 2日鎌倉見学。<br>6日日光見学。<br>27日野球早慶戦観戦。 |
| 6 | 1-9日雑誌課における業務研修。<br>(カウンター、受入れ、所蔵入力等)<br>12-16日理工学図書館における業務研修。<br>19-23日映像資料課における業務研修。<br>26-27日特別資料課における業務研修。 | 19日趙さんを囲む懇談会。<br>28日東大、ＮＨＫ等見学。<br>29日国立博物館、上野動物園等見学。<br>30日国立歴史民俗博物館見学。 |
| 7 | 3-21日外国図書課における業務研修。 | 21日趙さんを囲む懇談会。全館員集会。<br>24-29日京都、奈良、大阪、神戸旅行。 |
| 8 | 21日図書館へ最後の来館。22日横浜港より離日。25日上海到着。 | |

ただ、このような研修に関する発想自体が、あまりに日本式で、おしつけがましいものであったのかもしれない。

とにかく、趙申氏の研修全般を通じて、現在思うことは、もう少し、趙申氏が、日本語の出来、不出来にかかわらず、自分がどのように感じたかを、素直に表現できる研修環境にしてあげればよかったと思う。中国の図書館とは、極端に労働環境が違い、見も知らぬ異国人の中で、慣れない日本語でコミュニケーションをはかることは、相当なストレスを感じたことだろう。心から、彼の日本研修における、文字どおりの「勤行」を称えたい。

7月21日、趙申氏は、全館員集会に参加し、図書館研修の全てを終えた。翌週、私は、彼を伴い、関西旅行に出発した。《表5》は、趙申氏の関西旅行の記録である。宿泊費および交通費は、私の報告に基づき、図書館が負担した（約14万円）。本来ならば、このような旅行は、私的な旅行として、趙申氏の負担により、すべての費用がまかなわれるべきものであるかもしれない(私の北京旅行は、個人的なものであり、復旦大学図書館は、一切の費用を出していない。ただし国内旅行費として600元＝日本円約6000円が5月の時点で支給されていた)。待遇条件にもこのことは記載されていないが、私の中国における数回にわたる意義ある国内旅行との見返り（北京旅行以外は、すべて復旦大学図書館がその経費を負担してくれたようである）といった面を考慮すれば、図書館による経費のまかないは、それなりに妥当ではないだろうかと思う。ただし、今回は、初めての両校図書館員の研修交流であり、あくまでも特例であることを、趙申氏には伝えた。

## Ⅶ. 今回の研修の問題点

日中双方の大学図書館にとって、初めての試みであった今回の館員研修交流に関して、やはり相互に、研修の受け止め方、意識に隔たりがあったことは、否めない事実であり、今後、この差をより縮小していき、より大きな共通の認識を互いに有することが、望まれると思う。そのために、こ

《表5》　趙申氏の関西旅行

7月24日（月）京都
・8：56、のぞみ7号にて京都へ（11：12着）
［見学場所］
・八坂神社　・清水寺　・智恩院　・三十三間堂　・京都タワー　・東本願寺
［夜］
・寺町通〝呑道楽〟にてカニ料理を食す。
・八坂神社の神輿の御渡りを見る。
7月25日（火）京都
［見学場所］
・京都御所　・銀閣寺　・上賀茂神社　・嵐山（周恩来の詩碑見学）　・天龍寺
［夜］
・新京極〝三嶋亭〟にてスキヤキを食す。
7月26日（水）奈良
［見学場所］
・興福寺　・春日大社　・東大寺
［昼］
・興福寺門前〝菊水楼〟にて懐石料理を食す。
7月27日（木）大阪
［見学場所］
・大阪城
・〝アクアライナー〟に乗船し、中之島水上巡り
［夜］
・道頓堀にてしゃぶしゃぶを食す。
7月28日（金）神戸
・神戸ポートタワー
・遊覧船〝パルメデメール〟にて神戸港一周フランス料理付クルーズ。
・元町商店街、南京町散策
［夜］
・大阪南港ワールドトレードセンター(252m)にて夜景見学、中華料理を食す。
7月29日（土）
・8：54、のぞみ4号にて帰京（11：24東京着）。

こにあえて私自身が感じた問題点を記しておくこととしたい。

まず、日本人が中国で業務研修を行う場合の問題である。今回、私の場合は、自分が元来、興味をもち、日本ではなかなか勉強できない中国古籍の勉強を、学識のある館員の指導のもと、おこなうことができた。しかし、このような館員の存在しない、他部門での研修は全く行われず、簡単な見学にのみとどまった。今後、復旦大学図書館における研修が、私のように中国古籍に関心のある者ばかりとは限らず、また特定の館員ばかりの手を煩わすことは、復旦大学図書館にとっても多大な迷惑をかけることになる。中国の図書館業務の実際は、第3章でふれたとおり、社会主義体制における労働と、資本主義体制の労働とは、その意識からして相違があり、優れた学識ある館員のもとで特定の知識を習得する以外、研修の成果は得られないだろう。また、もしも上海や中国各地の名所・旧蹟を、半年間も旅行してまわるだけの研修だとしたら、いったい何のための図書館交流なのか、わからなくなってしまう。

確かに中国の現在の情況を肌で感じるということは、何ごとにも代え難いことだが、その中国社会が抱える厳しい問題点を考え、分析することにおいては、日本における方が逆に情報が入手できるケースが、往々にしてある。現地の中国人は、よほどのことがない限り、外国人には自国の悪い面を見せたがらないし、語りたがらない。外国人は、あくまでも「客人」としての分をわきまえなければならないのである。

私は、復旦大学図書館側より、上海の図書館雑誌に掲載するためだと依頼されて、日中両国の図書館に関する小論を提出した。だが、その文章が中国の図書館を「批判」しているということで、復旦大学図書館の館長先生は、たいへん機嫌を損ねられたということである。私は、大それた「批判」文章を書いたつもりは全くなく、ただ、図書館は利用者サービスの面に力をそそぎ、より「開かれた図書館」を目指していってほしいという主旨の文章を書いたつもりであった。中国人の「面子」とか、言論統制の厳しさに、うかつな面が、私自身にあったのかもしれないが、それにしても、

中国側が、自分のマイナス要因と考えているような側面に対し、日本側が「建言」しただけで、それがお互いの交流に水をさすような事態を引き起こすと言うのであれば、このような研修は、やめた方がいいと思う。ただ単に、すばらしい研修でした、優秀な図書館でしたと語るためだけに、半年間も研修を行うことは、少なくとも日本側にとって、これでは何の意味もない研修だと判断せざるを得ないだろう。

次に、中国人が日本で業務研修を行う問題点である。私は、趙申氏の研修を日本でお世話していて、つくづく両国の経済格差、およびそれにともなう「日本で研修すること（働くこと）」の彼らの生活にとっての重みを痛感した。

趙申氏の日本への渡航にあたり、中国側は、日本行きの渡航費や準備費の類いを一切、支給しておらず、趙申氏自身が、まわりからお金を工面して、来日した。また、日本側が「研修費」として、彼に月々支給するお金の何割かは、帰国後、外貨のままで大学に納めなければならないということである。この点に関して、中国側の詳しい事情は不明である。それ故、軽々しく断じることはできないが、このような派遣体制では、業務を学ぶというよりも、単なる「円稼ぎ」のための研修になってしまう恐れがあると思う。図書館での研修後の空き時間は、アルバイトでもしてすごしたいという気持ちが沸き起こっても当然である。確かに「研修」とはなっていても、外国で働くということには変りがない。自分自身の学習のためだけという研修ではなく、家族や友人、自分の所属する単位である図書館をも背負った研修であることを、理解してあげなければならない。その点の思慮が私には欠けていたのではないかと反省している。しかし、このような研修の有り様が、私には決して理想的な研修の形態であるとは、やはり思えない。仕方のないことかもしれないが。

以上、日中双方におけるこの研修の問題点をあげた。このような日中の研修交流は、経済的側面からすれば、決して対等なものとは言えないだろう。また、どれだけ自由に、率直な意見を交わすことができるか、このこ

とを抜きにしては、研修の存在意義自体が疑問視されることとなる。今後、日中双方が、この点をより真摯に考え、よりよい研修交流のあり方を、模索していけたらと思う次第である。

## 結び～今後の展望

中国と日本の国交が回復されてから、20年ほどの歳月が経っている。また経済分野ばかりでなく、学術分野においても、より一層、その人的交流は盛んになっている。すでに、「日中友好、中日友好」といった言葉を改めて唱えるばかりでなく、より現実を見据えたつき合いが求められる時期に来ている。全世界規模で進展している、コンピュータによる情報ネットワーク化の進展は、より開かれた人間・社会関係を求めるようになるだろう。このような情報化社会の潮流の中で、世界の図書館は、その社会変動にあわせて変化していくだろうし、また変化しなければならない。このことを、日中両国の図書館が、互いに共通の認識としていくことが、今後の研修交流に、何よりも必要なことではなかろうか。相手との文化背景、および社会環境の違い、その良い面も、悪い面もまず認め、相手の意見を無下に否定したりせず、互いに受け入れ、欠点を補いあって、より親睦を高めあうことこそ、真の交流だし、友愛だと思う。たいへん難しいことかもしれないが、早稲田大学図書館は、今後ともできるかぎり、真摯な態度で、この始まったばかりの、親愛なる隣国との交流に向き合っていくべきである。

1995年10月、復旦大学図書館から、引き続き、今度は、我が館の館長先生を上海に招待するという手紙が届いた。このインビテーションは、当面は、中国の図書館上層部における意識改革を推進することを、まず優先させた方がいいと語っていた趙申氏の提言が反映された結果だろう。次は、復旦大学図書館の館長先生が短期間来日されるかもしれない。早稲田大学図書館が、世界一優れた図書館であるとは、決して言えないが、中国側が、少しでも国外の状況に目を向けて、現状を変革させていきたいという意志を、我が館に対して示してくれることは、何よりも尊重され、かつ誇りに

していくべきことだと思う。

半年間という期間の問題等も含めて、今後、より一層、効果的な研修体制を、両館が具体的に改善していくため、率直な意見交換をはかる交渉の場を定期的に持つことを、21世紀におよぶ研修交流の展望を切り開くために、提言しておきたいと思う。

（たかぎ　りくお　外国図書担当）